

# 竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER



第22回交流会 箱根大涌谷にて



## Contents

- P.2 一語一会「知行合一」
- P.3 福光基金会を訪ねて
- P.4 第22回交流会レポート
- P.7 第23回交流会レポート
- P.8 竜の子近況報告

その夢は、きっと世界を変えていく  
*The dream surely changes the world.*



行灯制作 第23回交流会 浅草にて



第18回全国障害者スポーツ大会 ボランティアにて

- P.11 竜の子 (OB/OG) 近況報告
- P.13 SPECIAL REPORT I
- P.14 SPECIAL REPORT II
- P.16 編集後記／お礼の言葉

第13号  
Mar.2014

Tatsunoko Foundation



公益財団法人 竜の子財団

## ち こうごういつ “知行合一”

中国の明の時代に王陽明がおこした学問である陽明学の命題で、真に知るということは既に行っているということであるという事です。また王陽明は物事の形式にとらわれるのではなく本質はなにかを見極めなくてはならないとも説いています。更に行動を起こすときにはおおいに“ときめいて”結構だとも言っています。

この陽明学は日本でも1800年代に吉田松陰、高杉晋作、坂本竜馬など多くの志士が学び、封建的な江戸時代から自由で開放的な現代日本を創造する原動力になっています。

私は30年程前に先輩経営者から優れた会社を経営したいなら、この陽明学を自分の会社の経営哲学に入れてみなさいとアドバイスされ学び始めました。そのなかで特に印象深かった歴史上の人物では“山田方谷<sup>やまたほうこく</sup>”です。この山田方谷は1850年頃の偉人ですが、時の殿様から赤字の財政再建を依頼され、200万両（現代では約3,000億円）の借金をたった7年で完済し10年後には逆に200万両の蓄財までなしとげました。先ず彼は当時では考えられない財政の“デシクローズ”（隠し事の無い状態）を行い、債権者である大阪の商人に7年間返済の猶予をのませ、なんと担保で提供していた大量の米（当時の日本はお米がお金と同等の価値を持っていました）を返させ、自前で運用して利益を出し、地元の産物である鉄を利用した地場産業をおこし、それを消費者に直販するなど、当時では考えられない画期的な手法で経済を立て直し、その原資でいまでいう公共事業を数多く行い地域を大いに活性化させました。更に昔からの紙幣を多くの住民の目の前で焼き払い、金に換えられる新紙幣と交換しなんと住民には減税までやっしまいました。

そして信用が増した7年後には、新札の発行を行い（現代ではアベノミクス、金融緩和）借金をあっという間に返済したのです。

山田方谷はこの財政再建の実践後“理財論”という論文を残していますが、その冒頭には“義を明らかにして利を計らず…”から書き出されています。つまりテクニックで改革は出来ない、“大義”が先で、目先の利益を追ってはならない！という事です。この財政再建は最初から最後まで陽明学の考えが浸透しており、まさに知行合一を実践していたといえるでしょう！きっと山田方谷は常に義はなにか、本質はなにかを考え更に実行段階では前代未聞のことばかりの挑戦でしたからおおいにときめいたのではないのでしょうか。

現代ではなかなか知行合一を実践されてる経営者は少数ですが、そのなかでも秋元竜弥竜の子財団理事長は知行合一を実践されている偉大な人物で私も日頃から尊敬をしています。自分の資産の大半をこの竜の子財団に寄付をされ、その原資で“せっかく日本に学びに来てくれるのに経済的な理由で志半ばで帰国しなくてはならないなんてあんまりだ！出来る限り応援したいんだ！”との想いで大変な経済状況のなか、既に7年間も奨学金の交付を続けておられます。考えるだけならわかりますがなかなか実践を継続する方はいません。まさに知行合一の実践者です。

奨学生の皆さんも立派です。この竜の子奨学制度を活かし見事に難関の大学、大学院を卒業され日本を始めアジア各国の優良企業、研究機関に就職され竜の子奨学生が終了し就職してOBになっても、ほとんどの皆さんが秋元理事長や推塚常務理事との交流が続いているとの事、素晴らしい義の輪が広がっています。

竜の子奨学生の皆さんには是非とも、ただ大学院で専門分野の研究するだけでなく“知行合一”で実行実践して初めて真の知ることだと胸にきざみ、今後とも益々勉学に励んでいただきたいと思います。

### 岸野 一夫

1955年6月22日生まれ  
国立長岡工業高等専門学校 機械工学科 卒業  
株式会社 北越ケース 取締役  
株式会社 ウイルコーポレーション 取締役  
株式会社 未来塾 代表取締役塾長



### 「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。



## 福光基金を訪ねて

平成25年12月6日（金）、中国・福建省にて福光基金という竜の子財団と同じように奨学金を支給している基金の創設者である李明治氏にお会いするため秋元理事長とともに香港に行ってきました。私たちの活動に非常に興味を持っていただいて先方から招待されました。

朝10時頃、理事長を含む竜の子財団の方々5名と共に李明治さんの会社である聯合集团有限公司へ出発しました。聯合集团有限公司の近くにある中華料理店で昼食会が行われ、とても豪華な広東料理をごちそうになりました。そこで、私は初めて福光基金の創設者である李明治さんと出会い、お話をしました。

李さんに竜の子財団がどのような活動が行っているのかについて多くの質問をされました。東日本大震災後に被災地である女川町で行ったボランティア活動や、スポーツオブハートという障害者スポーツの支援などの活動をお話しましたら、人のためになる活動をたくさんしているなと感心くださいました。私も李さんから、福光基金は中国福建省発展という目的で設立され、今まで金融や経済分野で約4,000人の人材を支えてきたということを伺いました。さらに、李さんは父親の故郷である中国福建省のため、国内外から教授や専門家を招いて講義を行ったり、福建省の人々を研修の形で海外に送

り出したりなどしているようです。このような活動から、李さんが故郷である福建省に対する深い愛情を感じました。私も福建省出身なので、李さんが故郷を愛し、福建省のために多くの貢献をしてきたという話に感銘を受けました。将来、私も福建省のために少しでも貢献したいと思います。

昼食会が終わってから、私たちは李さんと一緒に聯合集团有限公司に戻り、李さんとの会談が引き続き行われました。その中で、私は李さんにどのような行動をすれば、成功できるか尋ねました。その答えとして、成功するためには、「1. 努力 2. チャンス 3. 運命」という3点が必要だと教えていただき、その中で一番基本的なのは努力です。そのためまず、自分自身を磨いてくださいとおっしゃっていました。

午後3時頃、会談が終わり、私たちはホテルに戻りました。李さんとの会談はとても短い時間でしたが、私にとって大変勉強になりました。

（担当：平成21年度竜の子奨学生 電気通信大学 林 熙龍）

最初に李明治さんのことを聞くや否や、インターネットなどを検索してみたら、ご高齢ながらも東南アジアやオーストラリアに跨るビジネスをされている人物像しか出てこなかったのですが、秋元理事長から福光基金の話をしたとき、少し驚きました。

福光基金は福建省政府が李さんの資金贈与を受けて設立した奨学財団であり、経済管理分野の高級人材の育成を主な目的としているNPOです。1990年に設立以来福建省の経済発展のために数多くの人材を育成してきました。その奨学生の中には中国国有企業、金融機関、政府機関の指導層までになって活躍している人も多く、現在の中国の国家主席である習近平さんもその一人だそうです。

このように次世代の人材育成に尽力している李さんに対して、ぼんやりと厳肅な雰囲気を持たれる方という勝手なイメージを抱えながら、12月6日の朝、私達は香港の中心部にある李さんのオフィスに訪れました。オフィスは予想より質素な雰囲気、私達の前に現れたのは成功した意気揚々なビジネスマンではなく、優しい表情を浮かべる元気な老人でした。私達の自己紹介を聞いた後、李さんは「いいですね、こういう人材育成のチャリティー活動はとてもいいです。」と

微笑みながら、福光基金の冊子を渡してくれました。

その後も竜の子財団の具体的な活動や、在籍奨学生の出身国などについて、興味深く質問してくださり、私達からも成功の秘訣についての質問をさせていただきました。話の中で一番印象に残ったのは、「成功は運命と実力の力合わせ」という言葉で、さらに李さんはこうおっしゃいました。「運命は定められたものであり、誰しものが一番になれるわけではない。それを承知の上で、努力するのです。」

確かに一番は一人しかいないですが、しかし一番を目指して努力するのは誰もができることです。私は今年卒業して、教師として次のステップに入りますが、この言葉は私の種になっただけでなく、これから受け持つ私の学生達にも伝えていきたいと思います。



（担当：平成21年度竜の子奨学生 明治大学 周 思恩）

## 第22回交流会レポート

平成25年8月3日～8月4日、竜の子奨学生たちは、世界的に有名な「温泉」を体験するため、第22回交流会を箱根で行いました。そこで温泉以外に、日本の夏の風物詩である魚釣りやスイカ割り、花火も体験し、日本の夏をたっぷり満喫しました。

竜の子奨学生は朝9時半に東京の新宿駅で時間通りに集まり、全員元気で笑顔や笑い声が絶えない和気藹々な雰囲気の中で10時10分発の小田急ロマンスカーに乗って箱根に向いました。



電車内の様子

12時くらいに箱根に着いて奨学生たちは、日本で1,000万人くらいが楽しみ、近年ではドラマやアニメ化にもされている「釣りバカ日誌」でお馴染みの「釣り」を体験しに釣り場に移動しました。

到着した場所は、室内または、川沿いでマス釣りをする店がいっぱいありました。竜の子奨学生たちは、箱根での夏の大自然を感じながらマス釣りをするために川沿いで釣り場に移動しました。そこでは「マス釣り」を盛り上



マス釣り

げるために、「誰が一番マスを釣れるか」という大会が急きょ開催されました。更に、昼飯を釣ったマスでバーベキューして食べるので、一匹も釣れなかった人は「昼飯無し」のハンデをかけて、いざ、Let's start マス釣り!!!!

竜の子奨学生の中には女性も多く、初めて釣りをする者もいて、釣の針に魚の餌であるブドウ虫を付けるのに一苦労していました。しかし、竜の子の男子奨学生たちが手伝い皆でマス釣りを楽しみました。

結果は、釣った魚が袋で混ざり、皆が優勝したとなりました。そして、皆でマスの塩焼きとバーベキューのお昼ご飯を楽しく食べました。炭火で焼いたマスの塩焼きは塩味が効いたシンプルな味でしたが、自然と自分の箸がマスの塩焼きに進み、一人で3匹も食べたので満腹満腹!!



バーベキューの様子

マスの塩焼きやバーベキューでお腹がいっぱいになったあと、日本では夏の風物詩の一つである「スイカ割り」を行うことになりました。大半の竜の子奨学生達は経験したことがないらしく、初めてのスイカ割りでウキウキした様子でした。スイカ割りのルール説明を聞いた後、班ごとに代表を出し、一番遅くスイカを割った班は皆にスイカを食べさせるお世話係をする罰ゲームにしました。その結果、私が入っている班がビリになりました。

割ったスイカには塩をかけて食べましたが、竜の子奨学生の中にはスイカに塩をかけて食べるのが初めてで、「美





スイカ割りの様子

味しくなった。」という人もいて、みんなで楽しくスイカを食べました。

その後、今回の宿泊施設である「ホテルおかだ」に向かって移動し、美肌の湯と言われる温泉を堪能しました。

竜の子奨学生たちの中には、長く温泉に入ったり、露天風呂を周ったりして箱根温泉を堪能していました。



夕食後、浴衣姿で記念撮影

温泉から戻った女性の奨学生たちは、ホテルに用意された浴衣を着て、皆で美味しい夕食を食べました。

20時半に食事を済まし、花火をするために竜の子奨学生たちはホテルのロビーに集まりました。

ホテルの外にある川沿いへ移動し、夜空の下で日本の様々な種類の花火を、子供のようにはしゃぎながら楽しみ



奨学生たちの夏の花火

ました。

竜の子奨学生たちは暗闇で光る花火を見ながら日本の夏を満喫しました。

翌日、少し曇りがちの中、箱根神社に参拝するため、日本で有名な箱根駅伝が行われるコースに沿って、風景を鑑賞しながらバスで移動しました。そこで、バスガイドさんから、バスが通る道は、昔東京に行くためには必ず通る道であったため、道路沿いにある様々な場所での由来や旅人が山賊におそわれたなどの昔話を聴きました。



箱根神社

9時半ごろ箱根神社に着き、芦ノ湖から龍が通る道と言われる階段を上り参拝した後、自由に周りを見学しました。実はこの箱根神社は、私が日本に留学する前、日本を探訪しにきた時立ち寄った場所でもあり、初めて「おみくじ」や「お守り」を買った思い出の場所でもありました。そこで、昔のことが懐かしくて、いざ「おみくじ」に久々に挑戦!!!! 結果、何と「大吉：勝負ことに勝つ（他の内容は省略）」。

一人だけハイテンションになった箱根神社での出来事でした。その後、一個食べると7年寿命が延びるという黒玉子を食べに行くため、芦ノ湖の「海賊船」に乗り大涌谷へ移動することになりました。

海賊船から降り、箱根ロープウェイで大涌谷に着き、黒



芦ノ湖の海賊船



大涌谷へのロープウェイにて



昼飯のほうとう



温泉からあがる黒玉子



大涌谷で黒玉子を食べる奨学生

玉子を思う存分食べました。その後、竜の子奨学生たちはその黒玉子が作られるところまで登り、温泉からあがるところを見たり、出来立ての黒玉子が下の店まで運ばれる様子を見たり、周囲に漂う硫黄の匂いも体験しました。

11時ごろ大涌谷を離れて、山梨県を中心とした郷土料理である「ほうとう」を昼飯として食べるため、「ほうとう」の店に行きました。ほとんどの竜の子奨学生たちは「ほうとう」という料理が初めてで、各自の席で「ほうとう」を待っていました。店の人がちょっと大き目の鍋を持ってきたので、最初は一つのテーブルごとの料理かなと思いきや、一人の前に鍋一つずつが運ばれました。「これ、一人で食えないよ。」という声があちこちで聞こえるくらい物凄いボリュームでした。初めて食べてみた「ほうとう」の個人的な味は、まろやかで野菜の味が効いた野菜うどん（実際の麺はうどんではないが）を食べている感じで



カルグッス

した。私の祖国の韓国料理に例えると、「カルグッス」という料理に近く懐かしい味でした。

昼飯の後、世界遺産にも登録された富士山をロープウェイから鑑賞する予定でしたが、食事後お店を出たら最悪なことに雨が降り始め、あいにく富士山を鑑賞することはできずに箱根を後にしました。

今回の箱根研修旅行では、普段研究ばかりでなかなか経験することができない、人々の生活に密着した日本の夏を体験することができました。

それに加えて、箱根は私が日本に初めて来た時訪ねた場所であり、(自分なりに知っていたつもりでしたが) 今回の交流会で自分が知っていたところはほんの一部であることに気づきました。日本のことをまだまだもっと知りたいと感じた交流会でもありました。

また、そろそろ日本での留学生活の終わりが近づいている状況で、留学する前の大切な思い出の場所である箱根に来ることができ、「初心を忘れず、怠慢にならずに最後まで頑張ろう。」という喝を入れることができました。

最後に、「ほうとう」を食べながら、住む場所や住んでいる文化が違って、皆同じ地球に住んで、似たような食べ物を食べる。国が違えど考え方や趣好が似るので、つながっているんだなと感じました。

(担当：平成24年度竜の子奨学生 京都大学大学院 金 兌炫)



## 第23回交流会レポート

平成25年11月24日（日）竜の子奨学生は東京浅草に集まり、第23回交流会が開催されました。竜の子奨学生たちは人力車に乗って浅草を巡り、車夫から浅草の歴史を紹介してもらいながら、江戸文化を体験しました。

朝10時半、竜の子奨学生21名が東京駅八重洲中央口に集合し、一日の東京浅草研修旅行がスタートしました。みんな久しぶりに会って、お互いに挨拶した後、みんな一緒に地下鉄に乗って、浅草に移動しました。11時半ごろに浅草に着いたら、すぐ昼ご飯を食べました。お店の名前は釜飯「春」といい、大正15年で創業、元祖釜めしのお店です。みんな伝統的な日本料理を味わうことができ、大満足でした。



釜めし屋さんにて

午後1時ごろ、昼食が終わったら、雷門より人力車に乗って浅草を見物しました。人力車は、人力によって使われる車です。現在は、主に観光地での遊覧目的に営業が行われていて、車夫が観光ガイドとして、観光名所を解説してくれます。竜の子奨学生たちは二人ずつ分かれ、人力車に乗って、巡りながら浅草の歴史を解説して頂きました。



人力車に乗って

て頂きました。

45分間の人力車観光が終わったら、もう2時になっていました。その後、手作り教室に集まって、行灯作りを体験しました。行灯は、江戸時代で一般的に普及した照明工具である。竹、木、金属などで作られた枠に和紙を貼って、風で光源の炎が消えないように作られました。現在でも和風旅館などでインテリアとして見かけています。行灯の作り方を説明していただいた後、行灯を作り始めました。まず自分の好きなデザインを選んで、下書きをしてから、行灯の用紙に描き移します。各自好きな絵を描いたり、好き

な言葉を書いたりして、真剣に行灯を作っていました。1時間ぐらいで作品が完成したら、それぞれ満面の笑顔で写真を撮りました。



行灯完成の記念に

3時半ごろ、一旦解散して、自由行動で浅草を回りました。それぞれお土産を買って、食べながら歩いたり、浅草寺などの名所を観光したりしました。

5時半に集合場所に集まり、スカイツリーを見たり、話しながら、屋形船乗船場へ歩いて移動しました。

屋形船に乗ったらもう7時になっていました。秋元理事長が挨拶した後、宴会が始まりました。おいしい刺身、かに、天ぷらなど海鮮料理を頂き、そして、船の屋上にのぼりお台場の夜景などを見ることができました。

8時半ごろ、屋形船が越中島に着き、皆で記念写真を撮って解散しました。

一日の交流会は短かったのですが、日本の観光名所である浅草の歴史に関していろいろを教えていただいたり、行灯を作ったり、江戸文化を楽しく体験したことにより、さらに他の観光地の日本文化や歴史も学びたいと思いました。



レインボーブリッジを背に 屋形船の船上にて

（担当：平成23年度竜の子奨学生 東京海洋大学 呂 思文）

## 竜の子近況報告



白浜ドライブ旅行

シュ シン  
**朱 震** (中国・陝西省西安市)

京都大学 経済学研究科  
経済学専攻 修士2年

### 「学生生活のラストスパート」

残り僅かの学生生活をいかに充実して過ごせるように努力しています。

一番重要なのはもちろん卒業論文です。日本、中国とアメリカの電子商取引の比較研究をしているため、情報収集と分析モデルの設定で結構苦勞していましたが、いよいよ大詰め段階に入りました。修士段階の勉強として納得できる成果を出していきます。

修士入学前から始めて3年間続いてきた企業プロジェクトについて、様々なタイプの企業を訪問してビジネスプロセスを分析しました。その上で、最後の一年に一企業に対して、レクチャーの形で分析結果を実証できました。この経験は会社に入ってからもっと活かしていきたいと思います。

最後は旅行です。運転免許を手に入れたため旅行も楽になりまして、2ヵ月に一回の頻度でドライブ旅行をしています。



駒沢大学社会専攻学生に特別講義を行った様子

**イット ウィサル**  
(カンボジア・タケオ県)

東京工業大学 理工学研究科  
土木工学専攻 修士2年

### 「駒沢大学で特別講義を行いました」

駒沢大学社会専攻の教授から依頼を受け、自分の体験や考えなどを大学生の前で話しました。「人は生まれるところを選ぶことができません。しかし、どう生きていくかを決めることができる。」という内容でした。

その後、質問タイムでは、たくさんの学生が手を上げて質問してくれました。その中に答えられないくらい難しい質問もありましたが、皆興味を持ってくれてとても嬉しかったです。



地球祭りの韓国チームと記念写真 (本人中央)

イ デイヨン  
**李 大英** (韓国・ソウル市)

北海道大学  
水産学部 修士1年

### 「地球祭りでリフレッシュ」

地球祭りとは、函館に住んでいる色々な外国人が母国を紹介し、日本人との交流を深める行事です。今回は韓国人の交換留学生たち(写真)と共に、韓国の伝統ゲームや観光地を紹介したり、チャプチェを作って販売しました。今年は約700人という多くの日本人が訪れたそうです。はじめてやる韓国の伝統ゲーム‘チェギチャギ’はとても難しく大変でした(実は韓国人にもちょっと難しい)。しかし、下手でも、上手でもみんな楽しく、そして一緒に笑いながら色々話ができて、良い思い出を作ることができたと思います。

現在は研究に励むと同時に、就職活動準備で多忙な日々を送っていますが、このような行事に積極的に参加し、ときにはリフレッシュしています。



第23回  
交流会で行灯作り

**マハルジャン スニル**  
(ネパール・KATHMANDU)

東京電機大学  
情報環境学部 情報環境学科4年

### 「就職が決まりました」

日本ソフトウェアエンジニアリング株式会社で1か月間のインターンシップ後、内定をいただきました。インターンでは、今までやったことがないサーバの構築を1人でしていました。現在こちらの会社では、母国ネパールで登山者が行方不明になるケースを防ぐ為のシステムを作っています。私もそのプロジェクトの一員になり、技術的なことの手伝いや通訳などをしています。昨年12月に実際のシステムのテストの為に母国へ行きました。日本と母国の架け橋になりたいと思っていたことがやっと叶いました。就職が決まらなくて辛かった時に支えて頂いた竜の子財団の方々に心から感謝しています。頑張ります！





お母さんと新しい義理のお兄さんと（本人中央）

キム テヒョン  
**金 兌炫**（韓国・ソウル市）

京都大学大学院 工学研究科  
機械理工学専攻 博士課程2年

## 「新しい家族が増えたので、勉学を頑張っています」

昨年亡くなったお父さんの法事や韓国の収穫祭である「秋夕（チュソク）」の日にちが重なり昨年9月韓国に一時帰国してきました。その時、次女の姉さんの旦那さんと初めて話してきました。最初はどう話を進めばいいかを迷いましたが、意外と自分と趣味も近くて話の花が咲きました。その時、また新しいお兄さんを得たようで嬉しかったです。

最近の私は、来年度卒業をする為に、研究室では実験用のロボットのプログラムの格闘中で、家では衰えた基礎知識を思い出すために新しい専門書を読み始め、毎日充実した生活を送っています。



チェンマイで見つけたお寺

**アンガラニ スリアユ**  
（インドネシア・バチサンカル）

九州大学大学院 総合理工学府  
物質理工学専攻 博士課程3年

## 「タイで学会に参加しました」

昨年11月に、私はタイのチェンマイ市で行われた化学センサー学会に参加しました。今回は、センサーの世界で有名な研究者の方々と話すチャンスがあったので、非常に嬉しかったです。

学会の後はチェンマイ市内を観光しました。タイを訪れたのは初めてですが、よく見ると、タイはインドネシアと似ていると思いました。料理や果物、天候、人の顔などが同じだと思いました。タイでリンゴバラ「英語：ROSE APPLE、タイ語：SHAMBU、インドネシア語：JAMBU」を食べました。8年間位これを食べていなかったの、とても嬉しかったです。チェンマイ市は交通が少し不便ですが、全体的には楽しかったです。



沖縄のある海で

シュ リン  
**朱 琳**（中国・黒竜江省）

東京外国語大学 総合国際学研究所  
国際協力専攻 修士1年

## 「就活を必死に」

昨年11月の下旬、まるで夢みたいな沖縄の海で楽しい5日間を過ごしました。しばし就活の悩みを忘れることができたが、現実に戻ってきたらすぐ12月に入っていました。

努力すれば必ずいい結果が出るわけではないが、努力しなければ絶対いい結果が出ないと思います。いよいよ本番に入って来る就職活動、焦ったり怖がったりしているが、自分がどのような会社や仕事と出会うか、とわくわくもしています。「人事を尽くして天命を待つ」。ただ自分を信じて必死に努力して、相応しい結果を待ちます。



ソウルろう学校開校100周年記念碑の前で、校長先生、附属ろう学校校長先生、中学部の先生2人と（右から2番目が本人）

キム ウンハ  
**金 恩河**（韓国・蔚山市）

筑波大学大学院 人間総合科学研究科  
障害科学専攻 博士後期課程3年

## 「韓国のソウルろう学校に行ってきました」

筑波大学附属聴覚特別支援学校（附属ろう学校）と韓国のソウルろう学校が協定を前提として、交流をはじめるということで、私が通訳として附属ろう学校の先生方と一緒にソウルに行って来ました。ソウルはすごく寒かったですが、両学校の校長先生と中学部の先生方間の良い交流ができて、寒さも疲れも感じられないくらいでした。その場でも話がありましたが、「政治的には両国が離れてる時でも、やはり、人と人があって話してみるとお互いの温かさを感じられますね」と附属ろう学校の校長先生がおっしゃいました。聴覚障害領域で研究をしている一員として、これからも両国のろう学校との交流も活発にできることを願って、頑張ります。また、やっと今年も分のデータがとり終わったので、これからの分析も頑張ります！！



研究チームのメンバーの集合写真@高松サンプォートホール（本人右から4番目）

## ビクラマシンハナヴィンダ キトマル （スリランカ・コロンボ市）

九州大学大学院 工学府  
航空宇宙工学専攻 博士課程1年

## 「学生生活から社会人生活に向けて」

2014年4月から独立行政法人電子航法研究所で研究員として働かせて頂くことになりました。九州大学博士課程の在籍中に東京で勤務する予定であり、現在新しい生活に向けて準備を整えています。また、博士課程の早期終了を目指しているため、学位を取得するための要件を短期間で満たせるように研究活動に取り組んでいます。

昨年11月に高松で行われた第51回飛行機シンポジウム国内学会と同時開催の飛行機シンポジウム国際セッション両方で研究発表を行いました。残り少ない研究生活を充実したものにするよう頑張ります。



「京」コンピュータの見学

## リン キリュウ 林 熙龍（中国・福清市）

電気通信大学 情報理工学研究科  
情報・通信工学専攻 修士2年

## 「修士論文を頑張っています！」

昨年の8月に理化学研究所で修士論文のために、ソフトウェア開発と研究活動をしてきました。また、学生生活の最後の夏休みの時間を利用して、車の免許を取得しました。

最近は今まで行った研究結果をまとめて、修士論文を作成しています。また、HPCS2014へ投稿した論文は採録となったので、修士論文の作成と同時に学会発表の準備も行っています。今年の2月ごろに修士論文を提出するので、毎日とても緊張感を感じています。卒業するまであとわずかの時間しかありませんが、毎日を大切に過ごしていきたいと思います。



学校の図書館にて

## シュウ シシ 周 思思（中国・江南省）

明治大学 商学研究科商学専攻  
金融・保険・証券専攻 博士後期課程3年

## 「博士論文無事完成させました！」

昨年9月末に博士論文の初校を無事に提出し、その約1カ月後に通過の通知を頂きました。これで、長い長い博士後期課程もようやく終点を見えてきました。計算してみたら、これまでの人生で約22年間を学生として生きてきたことに気づき、自分でも驚きました。

これからは、一社会人として、引き続き研究に励みながら、優秀な教育者としての自分を目標に、新たな夢追い旅の準備に取り掛かります。



甥っ子と浅草浅草寺の「大吉」おみくじ

## ジョ 徐 ミンジョン（韓国・ソウル市）

筑波大学大学院 人間総合科学研究科  
芸術専攻 博士後期課程3年

## 「久しぶりに家族と会いました」

昨年末から1月にわたって、日本全国384の景観計画策定団体を対象として「地域の特色を活かした景観色彩計画に関するアンケート調査」を送付するなど、忙しい合間を縫って、韓国の家族が日本にきました。父・母・姉・甥二人に「日本らしさ」を感じてもらうため、浅草・箱根などに行きました。そこで、竜の子財団交流会での経験を活かして観光ガイド役を上手にこなすことが出来ました。浅草の浅草寺で引いたおみくじが「大吉」で、みんなが喜んだり、箱根の温泉でゆっくりくつろぐなど、半年ぶりに会った家族と楽しい思い出をたくさん作ることができました。今回の家族旅行の思い出を励みとしてこれからの研究も頑張ります。



## 竜の子(OB・OG)近況報告



名古屋市の白鳥庭園にて

リュウ チボン  
**劉 知凡** (中国・遼寧省大連市)  
東京大学卒業

### 「落ち着いた日々」

皆様お久しぶりです。自動車部品関連の仕事に転職してからはや一年が経ちました。新しい仕事にも慣れてきて、今は毎日落ち着いた日々を過ごしています。転職を決意した当初はワクワクしながら不安も抱えていましたが、今はその選択に後悔していません。

私の仕事は日本用として開発された製品を中国向けに仕様変更させることです。設計をやりながら、現地のお客さんと対面して要望を聞くことも多く、非常にやりがいを感じています。そして何より職場が近いです！ 前の仕事の教訓を活かし、今は会社まで自転車で15分ほどの所に住んでいます。朝の通勤が非常に楽になりました。

これから新社会人になる竜の子奨学生の皆さん、ぜひ会社から近い所に住みましょう～



湖州市テレビ局からのインタビュー

チョウ チュウ  
**張 冲** (中国・浙江省平陽県)  
立命館大学卒業

### 「改良品質 改变生活 改善環境」

竜の子財団の皆様、ご無沙汰しております。OBの張冲です。

現在は、中国の浙江省で環境改善と現代農業を中心として、生物技術会社を立ち上げています。加百列生物といいます。

「改良品質 改变生活 改善環境」を目指して、日々努力を尽くしています。会社を立ち上げてから約一年が経ち、業務も軌道に乗りつつあります。

近年、中国の環境汚染問題がますます厳しくなっています。微力ではありますが、役に立てるように頑張っています。なお、農業面では一人でも多く完全食品を提供できるように土壌汚染や無農薬の推進にも力を入れています。

これから、同じ志を持っている方がいれば、ぜひ一緒に頑張りたいと思います。



タイに行ってきました (本人中央)

ギ トウキ  
**魏 登輝** (中国・河南省)  
東京外国語大学卒業

### 「わたしも頑張っていますよ」

皆さん、お久しぶりです。OBの魏登輝です。

私は今、愛知県名古屋市で務めさせていただいています。仕事内容は中古車の輸出に携わっています。

近年、日本の中古車の海外への輸出には実に見張るものがあります。中でもトラックや重機といった商用車の輸出台数は凄まじい好調ぶりを見せています。日本で10年、20年使っていても、さほど大きな修理をせずそのまま外国で使い続けられるということが要因の一つだと思います。「安心、丈夫」という定評はこれからますます東南アジアのインフラ整備などで大きな役割を果たしていくと考えられます。その中でわたしはその架け橋の一つになっていけるように頑張っていきたいと思います。

この写真は今年の夏、同僚と仕事としてバンコクに行った時の様子です。



化学実験テキスト

コウ エン  
**黄 艶** (中国・遼寧省瀋陽市)  
日本大学卒業

### 「化学実験教室」

竜の子財団を卒業して社会人になって、もう3年10ヶ月になりました。会社では仕事だけではなく、いろんなことを経験することができます。私が勤めている会社では子供たちに理科や化学の楽しさを伝えるため、幼児向けの化学実験教室を開いています。私もスタッフとして参加しています。幼児向け実験学習帳「ふしぎはっけん! ためしてみようかがくじっけん」を利用して、子供たちと一緒に実験をします。私も初心に戻って、実験の楽しさを思い出しながら、子供たちの笑顔を見て元気をもらっています。とてもよい評判を得て、今年は日本国内だけではなく、海外の子供たちにも伝えることができたかと力尽くしていきます。



家族3人で

パク ケイギョク  
**朴 敬玉** (中国・吉林省延吉市)  
一橋大学卒業

## 「研究と子育て」

平成20年度竜の子奨学生朴敬玉です。昨年12月、日本大学経済学部で朝鮮族研究会全国学術大会が行われ、3年ぶりに学会報告しました。タイトルは「横山敏男と満洲の稲作について」です。横山敏男は1939年に満洲に渡る前は池田寿夫という名前でプロレタリア作家として、活躍した人物であります。昨年の3月、韓昌祐・哲文化財団の研究助成金を授与しましたので、来年には本が出版できるように頑張ります。

息子はもう2歳6ヶ月になりました。話がだいぶ上手になりとてもかわいいです。「お弁当おいしかった？」と聞いたら「ママ海苔ごはん、ありがとう」と答えてくれたので、本当にうれしかったです。



平安神宮にて

マ ヨウ  
**馬 耀** (中国・遼寧省大連市)  
筑波大学卒業

## 「日々精進 教員生活」

皆さん、ご無沙汰しております。OBの馬耀です。

光陰は矢のごとし。竜の子財団を卒業してからはや2年経とうとしています。大学院の最終年に始めた非常勤講師の生活も3年目を迎えています。最初の頃の戸惑いに比べて、最近では「先生」と呼ばれた時に素直に反応できるようになったような気がして、自分なりに成長を感じています。

昨年から大学生の授業以外に、社会人講座も担当することにもなりました。日中関係が冷え込む中、自ら中国語の勉強を選択する受講者の方々に敬意を表さずにはられません。そんな方々の思いに応えられるよう日々努力しております。微力ではありますが、私の努力が、少しでも日中友好に貢献できたらという思いです。



社会人になってからの新生活～福島会津鶴ヶ城観光

デン アンナ  
**田 安娜** (中国・遼寧省瀋陽市)  
九州大学大学院卒業

## 「社会人になって初めて経験したこと」

今年4月、京セラケミカル(株)に入社し、8ヶ月が経ちました。

仕事内容は半導体の研究開発です。しかし近年、日本の半導体業界は不況になってきています。今後、中国市場へ展開していくので、自分が中日両国間で活躍できることを期待しています。現在、技術部で半導体の知識を習得していますが、中国支社に駐在するかもしれない話を聞き、自分の強みを活かしていち早く海外営業に行けたらいいなと思います。社会人になってから、仕事を通じて自分の「思い」を実現するのがとても難しいと実感しました。必ず自分が思う通りに行くものではないので、時々自分が本当に正しい道で歩いているか困惑してしまいました。

長い人生に困難がたくさんあると思いますが、どんな時でも自信を持って、すばらしい人生を送りたいと思います。



立命館大学にて

パク セヒ  
**朴 世熙** (韓国・ソウル市)  
立命館大学院 国際関係研究科  
国際関係学専攻 博士前期課程 (在学中)

## 「2013年は、夢に向かう行動の大切さ」

昨年は、「夢を持って向かう道・行動力」の大切さを肌で感じる事ができました。今年から「日本人のための韓国語講師」になることを目指してワーキング・ホリデーのビザを取って京都に来ました。経済状況では、夢よりもまずアルバイトをしてお金を稼ごうと迷いもありました。しかし、夢に向かう仕事が見つかるまでもうちょっと頑張ることになりました。その1ヶ月後、韓国語講師として働くことができました。

私の夢に向かう行動力によって2つ得ることができました。「仲間」と「もっと大きい夢」です。そこには、私とともに夢に向かって歩むことができる仲間がたくさんいました。また、仲間から頂いたアドバイスや励ましが原動力になり、彼らの夢は私の胸を動かししました。

現在は、大学で先生を目指して立命館大学の院生として9月から勉強しています。まだ、夢に向かった課題は数多くあります。しかし、いつも応援してくれる仲間と竜の子家族のため、夢を持ってこれからも前向きに頑張ります。

(担当：平成25年度竜の子奨学生 筑波大学 徐 ミンジョン)



# SPECIAL REPORT I

## ● 私の母国『ネパール』 ●

ネパールは多言語、多民族、多文化を持つ様々な人々が住む国です。地方によって、習慣や伝統が異なります。約3,000万人の人口の8割がヒンドゥー教です。その他に仏教・キリスト教・イスラム教などがあります。公用語はネパール語ですが、政府や企業、教育機関では英語が使われています。私も、幼い頃から学校での教育は英語で受けてきました。

ネパールと言えば山やカレーのイメージが強いと思います。確かに、ネパールは山国ですので山に囲まれています。世界一高い山「エベレスト」がネパールにあります。それ



エベレスト（現地ではサガルマタ）

だけではなく、世界で8,000mを超える14個の山のうち8個はネパールにあります。山好きな人から見れば天国だと思います。世界中から大勢の登山者やトレッキング

する人々が訪れるので観光ビジネスが第2産業になっています（第1産業は農業です）。

ネパール料理は、スパイスを沢山使って作ります。食習慣は地域によって異なります。ネパール料理は、インドとチベットの調理スタイルに影響を受けています。本格的なネパールの味はネワール族（私の民族）とタカリ族の料理に含まれています。ほとんどのネパール人はフォークやスプーンを使わず右手で食べます。基本的に左手はトイレでお尻を洗う時に使い、右手は食事用です。あちらでは、トイレトペーパーを使わず、水で流します。日常的に食べられている物はDaal（レンズ豆のスープ）、Bhat（ご飯）、Tarkari（カレー、野菜）とAchar（漬物）です。肉のカレー



モモ（ネパールの餃子）

は、非常に人気があります。しかし、高価であるため、肉のカレーは特別な行事の時に食べられます。Momo（蒸し餃子や揚げ餃子）がネパール人の間で最も人気の軽食の1つです。ポピュラーな形は小籠包に似ていて、具材だけが違います。最

も食べられるのは水牛の肉が入ったMomoが大人気です。ちなみに「肉のカレー」で使われる肉は、鶏・アヒル・山羊・羊・水牛等です。豚は、宗教的な理由で汚い物とされ、食べない人が多いです。

ヒンズー教では牛を崇拝しているから牛肉を食べてはいけません。また、牛はネパールのナショナルアニマルでもあります。来日するまでは世界中の皆が牛を食べないと思っていました。最も食べられる肉はBuffalo（水牛）です。しかし、日本では動物園でしか見られないのでびっくりしました。日本人の友達に「水牛も牛なのに」と言われましたが、ヒンズーで水牛は悪者が乗っている動物ということになっているので、牛とは区別されています。

ネパール人は、「純粹」と「不純」にこだわります。食品や食材を他人の口で直接、または間接的に触れることを「Jutho」と言い、不純だと考えられています。

神聖な牛の糞が純粹であると考え、自分の家を純粹にするために床に塗ったりして使います。生理中の女性は不純であると考えられています。その期間、神様の像に触ったり台所に入ったりすることが禁止されています。

ネパールでは、人間と同じくらい多くの神様がいます。そして、世界で唯一、生きている神様が存在します。少女であり、「クマリ」と言います。クマリになるには非常に厳しい条件やテストがあります。ネワール族の仏教徒のShakyaカーストの生まれでなければなりません。幼い頃に選ばれ、初潮を迎えたら引退します。クマリはTalejuという女神の化身とみなされ、大統領もお祈りを捧げに行きます。クマリの館には、一目見たいと観光客が集まっています。



クマリ（生き神）

お釈迦様（Buddha）が生まれた聖地ルンビニは、世界遺産に登録されています。ヒンズー教の神「Saraswati」は七福神の「弁財天」であるように、私達ヒンズー教徒にとっても大切な場所です。

ネパールの魅力をここで全ては書ききれませんが、バックパッカーが必ず立ち寄る国、時間のゆっくり流れる国に、長い休みを取って1度足を運んでみてはいかがでしょうか。

（担当：平成23年度竜の子奨学生 東京電機大学 マハルジャン・スニル）

## SPECIAL REPORT II

私たち竜の子奨学生19名は平成25年10月12日～14日、3日間にわたり開催されました「全国障害者スポーツ大会」に映像配信のボランティアとして参加しました。

障害者スポーツ大会は平成13年から、毎年、国体終了後に開催されています。障害のある選手が、競技を通じてスポーツの楽しさを体験するとともに、国民の障害に対する理解を深め、障害者の社会参加を推進するスポーツの全国的な祭典です。

今回、私ともう一人の奨学生が12日の卓球セッションの撮影を担当することになりました。



卓球会場前にて

午前9時、まずNPO法人STANDの事務局にてビデオカメラをピックアップし、そこから駒沢オリンピック公園体育館に向かって、電車で移動しました。駅から試合の会場まで、徒歩で10分程度の距離でしたが、ビデオカメラが重かったせいか、30分もかかりました。

会場ではすでにたくさんの運営スタッフが仕事をしており、映像配信のボランティア以外には手話の通訳ボランティアや会場の誘導ボランティアもいました。

試合は午後3時から始まるのですが、初めてビデオカメラで撮影することもあり、同行して頂いたSTANDのスタッフにカメラの使い方や三角スタンドの設置方法などを教えていただきました。

私は今まで、テレビでスポーツの生放送や試合の中継を見たことがありますが、自分で試合を撮影することは初めての経験でした。試合開始前に、撮影の角度を調整したり、ズームの機能を試したりしてみました。

昼休憩明けの2時ぐらいから、選手と応援団の人が入場し始めて、あっという間に客席がたくさんの人でにぎわってきました。私たちスタッフも準備万全で、いよいよ試合本番を迎えました。

一組の試合は30分から40分ぐらい続き、一試合目にリードしても、後から追いつかれてしまうケースは少なくはないです。試合を見ていくうちに、卓球はかなりの集中力と気力が問われるスポーツだと感じました。

障害者の選手たちは障害をもっているにもかかわらず、負けず嫌いの精神が伝わってきました。このように全国大会に出場できたことは、きっと健康の人の何倍以上の汗を流し努力を重ねた成果だと思います。

試合は7時ごろに終了し、その後、機材の片付けをし、事務局に戻りました。恵比寿駅の近くで他の竜の子奨学生たちと合流し、みんなと一日の感想を述べながら、食事をしました。

自分たちが撮影した映像はインターネットを通じて、たくさんの人が障害者スポーツ大会のことを知ってもらう、感心を持つようになれるといいなと思いました。一日のボランティア活動で少し疲れたと感じましたが、とても有意義な経験でした。



カメラを手にしてみて



会場内の様子

(担当：平成23年度竜の子奨学生 立命館アジア太平洋大学 杜 銘雨)



## SPECIAL REPORT II

平成25年10月12日、私は映像配信ボランティアとしてメイン会場の味の素スタジアムに行く機会に恵まれ、800メートル競走を撮影をしました。その日の朝、一人でNPO法人STANDの所に行き、ビデオカメラをピックアップして、それまで一度も障害のある人と話をしたことがない私でしたが初めて障害者と接することができました。

スタジアムに入って、ビデオカメラを設置した後、障害者の方々が生き生きと行動している姿を見て感動しました。なぜこのように感動したのかを考えてみると障害者だけではなく、彼らの傍で見守っていた方々の前向きさを感じ取れたことがその感動に繋がっていたのではないのでしょうか。

車いすの競技で、1位を取った選手を指差して、コーチが満面の笑顔で走り寄ったシーンが印象深く、一瞬でも長く彼らの笑顔を記録したかったです。その笑顔に出会い、私も心から嬉しくなりました。彼らは健康な人と変わらない早いスピードで走れるまでどのぐらい努力をしたのだろう。

最終位の選手が今にも倒れそうでも、ゴールまでラストスパートした姿、競技している選手の方々は諦めず、歯を食いしばって走っていた姿が印象に残りました。そして、1位の選手であろうと、最終位の選手であろうと観衆たちが熱い拍手で迎えること、さらに、視覚障害者の傍に全行程を完走するまで見守っていたボランティアたち。障害者の方々を中心に、彼らと関わりを持つ人々の絆を確かめました。

スポーツは年齢、性別、国籍、障害の有無を問わないものです。むしろ、障害者のほうがチャレンジしていると思いました。これからは物事を途中で投げ出したり、やる前から無理と決めつけてしなかったりしまわないように自分

も頑張れるはずだと思いました。

参加の前は「配信ボランティア」に対して少々気負っていたところがありました。お手伝いするような意識で始めましたが、4時間ぐらい経つと撮影のせいか肩が凝り出して、配信スタッフの辛さを感じました。

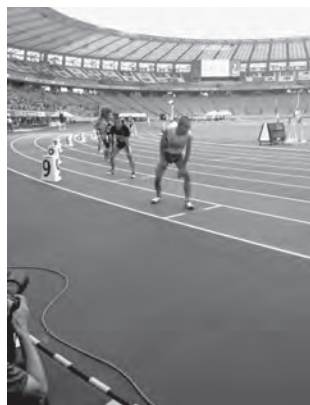
また、ビデオカメラを回し出すタイミングを選手と一致させるのも大変でした。選手に追いついて撮影出来るようになるまで苦勞しました。また、周りのプロの撮影者を見ると、機材が濡れるのを防ぐために、水を飲むのは厳禁だということも気付きました。責任を持ち仕事をするのが基本だとプロの撮影者から学びました。

突然、TV番組からのインタビューされるとは思いもしなかったです。初めは「今回のボランティアをするきっかけは何ですか？」と聞かれました。実は私はスポーツ大会のボランティアをずっとやりたかったのです。大学生の頃の2008年北京オリンピックも、2012年浙江障害者スポーツ大会も、ボランティアを申請をしていました。しかし、面接まで行きましたが、競争率が高く厳しかったです。そのようなこともあり今日のこのチャンスを逃がせないと思い、申請しました。

そして、「2020年東京オリンピックの時、またボランティアをやりたいですか？」という質問がありましたが、7年後の東京オリンピック・パラリンピック開催時、機会があれば、ボランティアをやりたいと思います。

今回のボランティア体験は私にとって、とても貴重な体験でした。しかし、今回は障害者の方々とともに交流を深めたいです。傍でビデオカメラを通じて彼らの姿を見るだけではなく、彼らと身近に交流する機会を得たいです。

これからもスポーツの感動を共有し、ボランティアの有用性を高めたいです。



競争する選手たち



撮影者の真剣な仕事ぶり



(担当：平成25年度竜の子奨学生 東京大学 馬 瓊)

## 編集後記

委員長 東京海洋大学 呂 思文

竜の子奨学生になってからもう3年が経ちました。今回、第13号「竜の子奨学生」会報の編集員長を担当させていただきありがとうございます。また編集委員長も担当させていただいたので、最初に責任重大を感じて、少し不安を抱えていましたが、みんなの協力で順調に完成できましたとても嬉しいです。それと共に、原稿作成を通じて、去年の交流会を思い出して、再びその時の楽しさを感じました。最後に、編集に携わった方々、作成に協力していただいた皆さんに感謝いたします。

副委員長 京都大学大学院 金 兌炫

皆さん、会報誌を読んでいただきありがとうございます。竜の子奨学生として2年目で、人生の中で初めての編集委員を任されました。この仕事を受けた後、自分はバリバリの理系であり読書も好きじゃないので、この仕事をちゃんとこなせるのが心配でした。いざ編集会議に参加してみると心配通りに、修正する内容を他の編集委員に説明する際、自分の文書や会話の能力が未熟なので、もっと工夫して表現する必要であることを実感することができました。最後に、竜の子財団を支えてくださっている寄付者様と関係者様、そして今回の編集委員の皆さん、ありがとうございました。

委員 東京電機大学 マハルジャン スニル

4月から就職することが決まり、最後に編集委員として参加出来て嬉しかったです。私は今回、SPECIAL REPORT Iを担当しました。母国をもっと知ってもらえればと思い、ネパールを紹介しました。来日後6年ぶりの一時帰国と風邪が重なってあまりお役に立てない状況で、編集委員の皆がサポートしてくれた事に感謝しています。母国の事や感謝の気持ち、まだ伝えきれないことがもっと沢山残っているような気がして寂しいですが、この経験を社会人になってから生かしたいです。成長させていただき、ありがとうございました。

委員 筑波大学大学院 徐 ミンジョン

この度は竜の子奨学生になって初めて、第13回竜の子会報誌に編集委員として参加させて頂きました。コンテンツの中では近況報告を担当し、皆様から寄せられた近況報告をまとめる役割を行いました。今回は現役の奨学生だけではなく、OBの皆様からの近況も頂いたので、研究や仕事で頑張っている竜の子奨学生とOBの皆様の活躍を見ながら「私も頑張ろう」と勇気づけられました。編集会議からは「誌面を通じたコミュニケーション」に対して貴重な景観がで、良い勉強になりました。毎回の編集会議、楽しかったです。皆様お疲れ様でした。ありがとうございます。



第3回編集会議にて



第2回編集会議にて



第1回編集会議にて

## ご寄付いただいた皆さまへ

このたび、竜の子奨学生全員を代表して、ご寄付いただいた皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。お陰様で、日本での勉強や研究に専念できました。そして、経済上の支援だけではなく、精神面でも支えていただきました。交流会や様々な社会活動に参加する機会を与えられ、異国間の文化交流を深めることができ、ボランティア活動などを通じて、感謝の気持ちを忘れずに社会に恩を返すことの意義がわかるようになりました。今後、私たちは社会に出ても、竜の子奨学生の一員としての信念と誇りを忘れず、自分の夢を叶えて努力したいと思っております。

(平成23年度竜の子奨学生 東京海洋大学 呂 思文)



## 「その夢はきっと世界を変えていく」

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている  
その夢はきっと世界を変えていく 平和のため  
いろんな事があるけれども どんなときでも

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に  
夢 希望をかなえる為 みんなは生きている  
その夢はきっと世界を変えていく かならず